

万葉集と民俗学

折 口 信 夫

「万葉集と民俗学」といふ題は、非常に關係が深さうですが、強ひて關係附けるとつまらなくなりませう。そこでは、今日は一つの事項に就て申上げてみませう。

民俗学の最も古い問題の一つで、今では大変に変化して、いろ／＼の段階を示してゐるものに、道祖神の信仰があります。此信仰は、日本中に行渡つてゐるやうで、実は、濃淡があります。だから、道祖神を知らない処もあれば、又、同じく道祖神と言つても、別に関係のないものを關係附けて、道祖神と言つてゐることもあるやうです。只今の研究者は、これらを皆、一のものだと考へて居りますが、今のうちは、其考へでも良いでせう。古今集あたりを見ますと、あの古い時代に、そろ／＼道祖神の歌が見られます。

たむげには つづり(古代研究) 袖も 截る(古代研究) たつべきに、紅葉にあける 神やかへさむ

たむげには、二つの意味があります。たうげ(峠)といつた場所が、たむげであると同時に、其処に祀られてゐる神——でもん・すびりつとと言つた靈的なもの——に供へものをすることが、たむげでもあるのです。かうした峠の神に供へものをすることを、たてまつる、まつるとは言ひません。ひつりは、昔の僧侶の纏つてゐた粗末な衣——表も裏も同じ着物——です。漢字で書けば直綴で、それを日本語でひつりと言ひます。一首の意は、峠の神の手向けとして、直綴の袖を截つて差上げていゝのだが、此処にいらつしやる神さんは、紅葉の錦で満足していらつしやる

から、つき返されるだらうといふので、さう講釈すると、大要文学的ではありませんが、前代の生活が、緩やかな、長閑な感じで入つて来るのを覚えます。昔は、山の峠にもを手向ける神さんが居た訣で、此処を越えてゆく旅人が、その着物の袖を差上げる風習があつたのですが、此歌では、其神さんは贅沢だらうと想像してゐるのです。さうした処にゐる神は、ものを欲しがると、人間が考へてゐました。人間がさう考へてゐたのですから、神が欲しがるのは事実です。それが手向けの神の信仰です。中世から今に到るまで、さうした事を信じてゐる人は、沢山ゐます。田舎へ参りますと、坂口で躓き仆れると一年以内とか、三年以内に死ぬと言ふ処があります。その時、着物の袖を剃いで置いて来る習俗があり、其神を袖もぎ様と称してゐます。これは、袖もぎ様といふ神さんが、袖を欲しがるものと考へ、神の意志を董つて、人間が袖を截る訣です。此神は、彼方此方にあつた神さんですが、今では、山の中へ行かなければ、殆ど見られません。恐らく、神が着物——袖は着物の一部分であり、その代表——を催促するのだといふ風に、昔の人は、神の意志を推董つてゐるから、袖だけをちぎつて上げたのですが、今なら、袖だけでも上げないでせう。長い道を旅してゐる人が、切り幣カキハタを用意して、峠とか山を越える時、それを撒いて通つて行つたもので、幣ハタ袋フクロに切り幣カキハタを容れたといふ事は、よく聞いて居られるでせう。

ところが、さうした処にゐる神は、着物ばかりではなく、何でも欲しがるのです。峠、坂以外、例へば、海の渡り場を船で通る時でも、其海峡に神がゐて、船にものを要求し、船の顛覆しさうになつた時、大事なものを海中に投じて、道の神の機嫌を取結ぶ訣で、中には、女を投じるといふ言伝へまであります。それは、神が何でも欲しがるといふことです。旅に出た人間の通らねばならぬ処が、峠であり、海の渡り口であり、海峡であり、其処にゐるでもんずびりつとといつた精霊が、ものを催促するのです。先に申しました歌は、古今集に見えるものですが、万葉集にも相当あります。東歌の相模国の歌に、次のやうな歌が見えます。

足柄の御坂かしこみ、くもりよの我がしたばへを言出ことばつるかも

くもりよのは、したばへに懸る枕詞で、自分の心に深く抜がつてゐる恣心が、したばへです。その思ひを口に出してさんげ(懺悔)したといふことです。昔からさんげといふことを言ひ、山に登つて行をして、神に言ふのがさんげで近年ではさんげと濁つて言つてゐます。今まで言はなかつたことを口に出すのが、言出づなのです。足柄の御坂は、坂の敬語法で、同時に坂の神を言ふ訳で、足柄峠の神の恐しさに、たうとう思ひを口に出したことよの意となります。つまり、道の神にどうしてもものを献上して通らねばならぬ信仰の見られる歌で、此場合は、心の底で思ひつめてゐることを告白したといふので、着物の袖などの物質的なものに較べて、抽象的ですが、かうした道の神に対する信じ方もあつたのです。人間のものを欲しがらぬ道の神を、田舎の人は考へてゐたし、又、旅行者もさうした信仰を持つて歩いてゐたので、自然、この恐しい神にもを手向けて、その前を無事に通して貰はねばならなかつたのです。それが、後には形式化して、着物が袖だけになり、更に幣ヌカとなり、切り幣キリヌカになると言ふ風に簡單になつて行つたので、さうした話は、範圍の広い話なのです。凡、道祖神の信仰とは縁の無ささうな万葉集のあちらこちらに、かうした信仰の見られる点を考へていただきたいと思つて、此話を出してみました。

万葉集の名高い有間皇子の歌に、次のやうながあります。

磐代の浜松が枝を引き結び、まさきくあらば、復帰り見む

磐代の浜に生えてゐる松を引き結んで、かうして神に頼んで置くが、その効果が現れて、万一自分が健康であつたなら、もう一度来て見ませう、と云ふのが一首の意で、神と約束をした歌です。あなたのおかげで、無事に健康でゐましたら、もう一度あなたの前を通つて行きませうと云ふ歌になります。有間皇子が、紀伊の牟婁の温泉——海寄りの白浜温泉とも、山寄りの本宮温泉とも云ふが、どちらか不明。多分、前者で、金山温泉あたりと思はれるのだが——に召された時、その途中の海岸にある磐代——此処は崖になつて居り、明治前までは崖下の道を通つたが、現在では崖の上を通つてゐる——の道の神に、供物を手向けて通つた時の歌です。単に松の枝を結んだと云ふだけでは、

空虚な話ですが、実は、其処には、靈的な一種のまじつくが秘められてゐるのです。つまり、人間の持つてゐる靈魂の一部分を取出して、一種の方法でそれを松に結附けると云つた、当時の呪術的風習が、其処には覗はれるのです。

神にものを献上する時は、木の枝に結附けるのが普通で、昔の人は、さうして通つた訳です。無事にもう一辺磐代を通るやうにしてくれと願つた御利益があつて、有間皇子は、もう一辺磐代まで立戻られ、其処を過ぎて後、藤白坂で縊り殺されました。牟婁の温泉で、天子に逢つた後、再び磐代まで戻り、其処を過ぎて殺されたと云ふことは、神との約束を神が守られた訣で、さうでなければ、意味がありません。笑話みたいに聞えるかも知れませんが、此処には、神の権威を信じてゐた昔の人の考が見られる点を、忘れてはならないと思ひます。この歌には、うっかり考へると、道祖神信仰は無いみたいに思はれるのですが。ところが、皇子の死を追悼して、後に作られた集中の歌は、
磐代の野中に立てる結び松、心も解けず いにしへ思ほゆ

など、一向、道祖神には触れて居りません。それが更に、平安朝になると、結び松は歌の題になつて居り、そんな神のゐた事は、すっかり忘れてしまつて居ります。つまり、面白いてきに捉はれて、興味を中心が他へ行つてゐる訳です。

万葉集に現れる中皇命は、一体誰方だらうかと云ふ詮議を昔からして居りますが、今日では、天智天皇の母であり、舒明天皇の皇后であつた、齊明、皇極天皇と極めてよいでせう。このお方の作に、

君がよも 我がよも知らむ磐代の、岡の草ねを いざ結びてな

と云ふ名高い歌がある。第二句、訓みの上で、しれやとしらむとの二説がありますが、前説は少しひつかかりがあるやうですし、円かに釈ける点、後説に従つて置きます。此歌は、舒明天皇と御一緒に、尊い方がお二方揃つて紀伊の国へ旅行された時の作で、有間皇子よりは大分以前のことです。君は舒明天皇。よ(齡)は壽命、健康。草ねは草のこと。ねは接尾語。一首の意は、あなたの健康も、私の健康も支配し自由にするところの、この磐代の神の居る岡

の草を、さあ結んで祝福させようと云ふことで、一緒に結ぶことを相手に勧誘してゐる訳です。道の神に、重大な捧げ物をして通らねばならなかつた風習は、天子と云へども、それを為なければ具合が悪かつたのです。此場合は、松の枝ではなく、草を利用してゐられるので、その草に靈魂を結附けて置かうと云ふのです。道の神は、人間の靈魂の残つた部分を欲してゐると、昔の人は考へたからで、お年玉も、その考へから生れて居ります。現在では、お年玉と云へば、金目の物を考へる風が抜がつて居りますが、それでも古風な地方では、鏡餅の小さいものを考へて居ります。これは靈魂のしんぼるで、換言すれば、歳神の靈魂がお年玉といふことになる訣です。神に靈魂の古い欠片カケラを与へて通れば、その無事息災を神が護つて呉れると云ふのが、古代に於ける呪術的風習で、私も魂結びしますが、あなたもなさいと歌ひかけてゐる此歌には、道の神に対する考へが、はつきりと出て居ります。かう解釈しますと、私は一番面白くない、田舎臭い解釈をすることになります。併し、さうなつても仕方がございません。その程度、我々の祖先の信じた儘、感じた儘を現せばよいと、私などは考へて居ります。従つて、結局はさういふことになつて来るのです。

これで肝腎の話の入口に達しましたが、あと時間は十分程ですので、一足飛に話は飛びます。

海のほとりに、海峡の神がゐて、海を妨げる神を、渡しの大神と云ひますが、柿本人麻呂の作にある、

玉藻刈る 敏馬を過ぎて、夏草の 野鳥が崎に、舟近づきぬ

の歌に見られる敏馬の神も、その一つです。そして、その神の性質は、皆、少しづつ違ふやうです。

万葉集卷三に、阿倍女郎が、屋部ヤベの坂を通つた時に作つた歌があります。

人見ずば、我が袖もちて隠さむを。焼けつつかあらむ。著すて来にけり

此歌は、かはいさうな歌で、余り顧みられて居りません。註釈書を読んでゐる人は、或点までは解けますが、さうでなければ解けません。これは、肝腎のものが省かれてゐるのです。だから、人が見てゐるからさうはしないが、見

弔ひ、変死者を弔ふ民俗信仰であつたのです。そして、これは、又、道祖神の出来る経路とも関係して居ります。聖徳太子が死骸を御覧になつた伝へは有名で、その歌は日本紀を始め諸書に掲げられ、万葉集では、次のやうな短歌形式で伝へられてゐます。

家ならば、妹が手纏かむ。草枕 旅に臥せるこの旅人 あはれ

家に居たならば、自分の愛人の世話を受けることが出来るであらう。だのに、旅で倒れていらつしやるこの旅人よ、あゝ、といふのが一首の意ですが、この歌なんかを見ますと、死骸を隠して置いてやると、死者の靈魂が感謝するものと考へてゐたのです。道の神は、その信仰の一面を見ると、旅で変死したものを葬つて蔽つてやることの酬いによつて、人間に良いことをする神がゐるといふことが、万葉集をみても、有力にわかります。

話が肝腎の所で短くなりましたが、阿倍女郎の歌にも、変死したものに對する労りが、根本の知識となつて居りません。何か人が、変死者を庇つてやらうと云ふ精神があつて、民間信仰となつたのです。さういふ風に考へが結附いて參ります。磐代の道の神、屋部の坂の話、聖徳太子の話、それを合してくれば、結論が出て来ますが、それを納得して貰ふためには、時間がありません。自分乍ら、尻尾を捲いて引退るより仕方がありません。

追ひ書き

昭和二十七年五月三十一日、朝日講堂で開催された上代文学会発会式に於ける折口先生のお話を纏めたものである。あれから二ヶ年の歳月が流れ、先生もお亡くなりになつてしまつた今、もう、この草稿に親しくお眼を通していただくことも出来ない。たゞ、お話の内容に過誤のないことをひたすら念願すると共に、文章の拙さを愧ぢるばかりである。

西角井正慶先生にいろ／＼とお心くばりをいたゞいた。一言文責の所在を明示しておく次才である。

(鈴木正彦記)